

名桜大学特別講義

90年の人生を振り返って

小 和 田 恆

2022年4月27日（水）

名桜大学特別講義

演題

「90年の人生を 振り返って」

2022年4月27日（水）



講師：小和田 恆 氏



砂川学長による小和田恆先生（講師）のご紹介

I. はじめに

皆さん、こんにちは。

今、砂川学長から大変ご懇篤な紹介をいただきました。立派な紹介をいただいて心から恐縮しております。恐縮すると同時に、砂川学長のお言葉にクレームをつけるつもりは毛頭ありませんが、冒頭にあまり立派過ぎるご紹介をいただくと、これから話をする私の立場からは大変難しいことになるのです。お分かりいただけたと思いますが、皆さまはすごい肩書を持った人が来たとお感じになるでしょう。その結果皆さんの期待値は高まるばかりです。私が本来しゃべろうと思っていたことより3倍ぐらいの期待値を持って話をお聴きになるでしょう。そうなると、私がどんなに立派な話をしても、皆さんは話が終わった時に「なんともつまらない話だった」と思うでしょう。逆に、ご紹介いただくときに「今

日は本来お呼びするはずだった講師の都合がつかなくなったので、この人にピンチヒッターとして講師をお願いしましたので、そのつもりで聴いてください」とでも言ってくだされば、皆さんは話が終わった時に「ピンチヒッターにしてはいい安打を打ったな」というふうに、逆にお感じになるのではないだろうかと思うのです。もちろんこれは冗談です。砂川学長からあまりにも立派なご紹介をいただきましたので、私としては、皆さんがそれをあまり額面どおりに受け取られて高い期待と真剣な姿勢で肩を張って話をお聴きにならないように、もうちょっと肩を緩めて今日は面白い話が聴ければいいと思うぐらいのつもりで話を聴いていただきたいというのが私のお願いだということなのです。

ちなみに、冗談ついでに申し上げますと、こういう講演などの機会にアメリカなどでは聴衆をリラックスさせるために冗談から話を始めるのが通例です。ところが、日本だと今日のように冗談を言っても聴衆が笑ってくれないのです。これはアメリカと日本の文化の違いだから仕方がないのですが、今日も皆さんはだいたい肩の力が入って私の話を真剣に聴いていらっしゃるのではないかと思います。あまり真剣にならないで、1時間半の話をお聴きいただきたいと思います。今、ここに来る車の中で名桜大学名誉学長の瀬名波先生から、最近の流行の言葉で、「チムドンドン」という言葉が流行っていると伺いました。これは沖縄語で、心臓がドキドキするということで、肩に力が入っているということを表すのだそうですが、チムドンドンの状態ではなく、もうちょっとリラックスして、落語を聴くようなつもりでというぐらいの気持ちで話をお聴きいただければありがたいと思います。

前置きが長くなりましたが、今日お話しするテーマとして、砂川先生ともご相談して、私の専門分野である、国際法の法的性質だとか、国際法と国際関係との相互関係というような硬いテーマは避けることにしました。私は今年で90歳を迎えますが、90歳になった人間は、皆さんのようにまだ20代の若い人たちから見ると、どんなことを考えてるのかなとお思いになるかもしれません。皆さんの中には、おじいさん、おばあさんがいらっしゃる方もたくさんおられると思いますが、今日は、私が90年の自分の人生を振り返ってみて、何が私の人生を決めたのか、その結果私がどういう人生を歩んだのかというお話をしたいと思います。それによって多少とも皆さんがこれから自分の将来を描く上で参考になることがあれば幸いだと考え、砂川先生にご相談の上でこのテーマを選んだわけです。

まず、お配りした「骨子案」の第1の点から始めます。私は国際司法裁判所を辞任して日本へ帰ってきたのが3年前のことですが、それ以来、ジャーナリストや私の友人から、回顧録を書けということをしつこく勧められます。おまえはいろんなことを経験してきたのだから、きっと面白い本ができるって言ってくれるのです。その好意はありがたいのですが、私は回顧録というものは書かないことにしております。なぜ回顧録を書かないのかとお考えかもしれませんが、回顧録は自分の経験したことを書くわけですから、あれは自分がやった、俺はこういうこともやったという話になりがちです。公務員として仕事をしてきた人間一世の中、人のために、国のために働いてきた人間として私は公務員になった

時からそういう気持ちで仕事をしてきました。その後、国際公務員も経験いたしましたけれども、基本的に私の生涯は、90年のうち70年は日本の外務省か国際司法裁判所というところで公務員として仕事をしてきたのです。

最近は、イギリス人もだんだん変わってきておりますが、イギリス人が好む言葉で Passion for Anonymity という言葉があります。「無名で働くことにかける心意気」とでも言いましょうか。つまり、縁の下の力持ちの人が、いくら力があって土台を支えていたとしても、この土台を支えてきたのはこの俺だというようなことは言わないという職業倫理のようなものです。つまり、そういう仕事に就く人の誇りであり、自分はこんなことあんなことをやったということを言うためにその仕事をしたわけではないということなのです。自分の職務に対して忠実であるためには Passion for Anonymity の心構えは非常に大切だということが一つの良き文化の伝統になってきているわけです。私もそういう心意気にあやかって、自分がやったことがたとえ成功物語であれ、失敗談であれ、回顧録はすべてみんな断ってきたのです。

その私が今日どうして『90年の人生を振り返って』というテーマでお話をするのかということになります。先ほど申し上げたように私が90年生きたことの中で感じたことを若い皆さんにお話することには、皆さんがこれから自分の人生を考えていく上で、どういう仕事をされるにせよ、私と同じ道を歩むわけでは必ずしもないかもしれませんが、いろんな仕事に就く上で、あの時こんな話を聞いたなということを思い出していただいて、それが皆さんを励ます、あるいは力づける、一つの源泉になるのであれば、これは90歳にもなった人間の若い人に対して果たすべき役目であろうと思ってお引き受けいたしました。テーマの背景説明が長くなってテーマ自体についてお話しする時間がなくなるといけませんので先を急ぐことにします。

私の人生は、先ほど砂川学長のご紹介からも分かるとおり、大きく言って三つの分野に分かれます。第一は、45年に近い外務省勤務で働いた仕事です。つまり、外交の実務に携わるという分野での仕事です。それが一つの大きな柱であります。二つ目は、大学で研究・教育に携わるという分野での仕事です。名桜大学だけではなく内外の大学で通算すれば40年以上にわたって教授として大学人としての生活をしてきました。それが2番目の柱です。第三は、最後の15年間、オランダのハーグで国家間の紛争を法によって解決する国際司法裁判所で裁判官として勤務した仕事です。行政官ないし外交官としての仕事、研究者ないし学者としての仕事、さらに裁判官ないし司法官としての仕事という、別々な三つの仕事をやってきたというふうに皆さまの眼には映るかもしれません。確かに、職業という見地から見ればそのとおりなのですが、私の頭の中ではその三つは、実は三つの別のことではなくて、その三つ全部が私の人生を貫く一つの糸によってつながっているのだということが、今日私が申し上げたい話の主題なのです。

Ⅱ. 戦争と私

なぜそういう人生を送ることになったのかということが、骨子案のⅡ「戦争と私」というところになります。私が生まれたのは、昭和7年、西暦で言えば1932年9月18日という日であります。ここにおいでの方々は、生まれていないどころか、皆さんのお父さんも生まれていなかった時の話ですから、ぴんときないでしょうけれども、私の誕生のちょうど1年前の1931年9月18日に「柳条湖事件」という事件が現在の中国東北地方で起きました。その結果、日本と中国とが軍事衝突したのが満洲事変です。私は満洲事変勃発の1周年記念日に生まれたわけであります。その後私がまだ小学校に入る前の昭和12年（1938年）に、今度は支那事変が起こります。「盧溝橋事件」を契機として、日本と中国とが本格的な戦争を始めたのです。「事変」と呼ばれているのは、戦争という事が大げさになるので事変と呼ばれたものの、これが、基本的には日本と中国との本格的な戦争の始まりでありました。その間に日本は一気に戦時体制に入り、通っていた学校も小学校から国民学校に変わりました。そして国民学校の3年生のとき、1941年12月8日に太平洋戦争が始まったのです。当時は「大東亜戦争」と言っておりましたが、敗戦後日本でも太平洋戦争と言うようになったあの戦争が始まったのです。こうしてみると、私の幼年時代は戦争の時代だったことがお分かりいただけると思います。

その中で私の生涯にとって一番決定的だったのは、この戦争で日本が敗北したという出来事でした。私が国民学校を卒業して旧制の中学校に入った1945年の4月には、沖縄に米軍が上陸、沖縄が日本本土としては初めて戦場となります。そして、その同じ1945年8月15日に、日本では終戦と呼ぶ日本の敗戦がやってきたのです。きれいごとで国民に提示するために「終戦」という言葉が用いられましたが、戦いが終わったということを国民に告げる天皇陛下の玉音放送によって、国民は日本が完全な敗戦を受け入れたことを知りました。この敗戦の玉音放送を私は中学校の1年生として学校の校庭で聴いたのです。そのときの私の気持ちはといえば、まだ子どもではありましたが、「一体何が起きたんだろう、どうしてこんなことになったんだろう」という、茫然自失というか、どう考えていいのか分からないという呆然自失状態であったように思います。もちろん、それは戦場となって戦った沖縄の皆さんのお父さん、お母さん、あるいは、おじいさん、おばあさんの経験に比べれば、比較にならないことでありましたが、私の頭の中では、世の中にこんなことがあっていいのかという世の中がひっくり返るような大事件だったのです。私が中学校に入ったのは、先ほど申し上げたとおり、昭和20年の4月です。当時すでに2年生以上の上級生は全員学徒勤労働員で名古屋だとか、東京だとかの周辺の軍需工場に勤労働員で派遣されており、学校の中はガランとして誰もいない状況でした。更に上の世代の学生は、学徒出陣で戦争に召集されて「予科練」などで訓練を受け、特攻隊に配属されたりしていた時代のことです。ですから当時の私も中学校1年生とはいえ、気持ち

としてはこの戦争に参加しているという思いでした。もちろん沖縄の皆さんの祖父母、曾祖父母のように、銃を取って戦闘員として一緒に戦ったわけではありません。しかし、毎日学校へ行って何をやらされていたかと言えば、国語や数学の授業を教わったなんてことは全く一つもなかったのです。入学した4月から8月までの間やらされたのは、米軍の本土上陸に備えての竹槍訓練。竹槍の突き方というのは、こういうふうにして使わないと相手は殺せないんだという訓練です。それから、戦車に向かって火炎瓶を投げる練習。これは、敵が戦車で上陸してきた時に、火炎瓶を持って立ち向かい、戦車の近くまで行って戦車にぶつけることによって戦車を撃退するというのです。それから、もう一つ、3番目は塹壕あるいは防空壕掘りです。敵襲に備えて隠れ場を作っておくことです。分かりやすく言えば、つまり、今ウクライナで起きているような出来事に備えて毎日訓練に明け暮れていたというのが、私が敗戦を迎えた時の状況だったのです。その中で敗戦の報を聴いて一番感じたことは、基本的に茫然自失の思いでした。どうしてこんなことが起きたのかと思いました。このどうしてこんなことになったんだろうかという思いは、その後の私の一生を規定したと言ってもいいくらいです。もちろん、朝から晩までそのことを90年間考え続けてきたというわけではありませんが、何をするにも、この問題が常に頭の中にあって、私の行動の原理というか、私の行動を規制してきたということを第1の点として申し上げたいのです。



特別講義で学生に穏やかに語りかける小和田先生

これは恐らく、皆さんには歴史の教科書を読むような話であって、もっと身近で戦争体験をした人でないと、現実感が全くないだろうと思います。ただ、沖縄の皆さんにとっては、皆さんのお父さんの世代、少なくともおじいさんの世代が現実に経験して、その中で、私の経験以上

に戦争というものを身をもって体験されたことなのです。今のウクライナの人たちと同じような形でそれを体験したという意味においては、皆さんもそういう話を折に触れて家庭の中でお聴きになることもあったかもしれません。その意味では、皆さんには私の申し上げたことが分かっていただけののではないのでしょうか。

では、敗戦がなぜそんなに大きなショックであったのでしょうか。皆さんにも想像力を

働かして考えれば分かると思いますが、今まで生まれてこのかた中学生になるまで、世の中はこういう原理で動いており、日本がやっている戦争はこういう意味があるのだと毎日教え込まれてきた子供にとって、夏休みになった8月のある日突然、必勝を信じていた祖国の敗戦を知らされ、君たちが今まで信じてきたことはみんな真っ赤な嘘だったんだ、みんな間違いだったんだからそれは全部忘れなさいということを告げられるという、文字通り「驚天動地」のことが起きたのです。人間にとって、自分が信じ込んできたこと、神様を信ずるように信じてきたことが、みんな嘘だった、そんなものはなかったんだと思えと突然言われたときの混乱ぶりというのは、皆さんにも想像ができることと思います。

私は、その点で、私の世代が一番不幸な経験をしたとは思いません。私の前の世代は、先ほど私がお話したように学徒動員の工場勤務で働かされてきた人たちです。さらにその上の世代は実際に学徒出陣で戦場で兵士として戦わされた人たちだったのです。その人たちにとっては、日本敗戦の報がもたらした驚愕というものは、私が経験した驚きの比ではなかったと思います。その結果どういうことが起きたか。その人たちは、結局、世の中には信ずるものなんか何もない。今まで自分が、これが自分の生きる道だと思って信じてきたことが、みんな嘘だったと言われたら、一体何を信じたらいいのかということ在必死になって考えなければならなかったでしょう。もちろんその中には、新興宗教に奔った人もいました。しかし、大部分の人たちにとっては、そういう救いはありませんでした。自分の人生をこれからどうやって生きていくかという問題になった時に、ある人たちは、オポチュニスト（機会主義者）になりました。つまり、世の中にはどうせ信ずるものはないんだから、何も信じないで要領よく生きていこうという生き方を選びました。自分の信念はこうだからなどと言ってその信念を貫こうなどとは思わずにただ毎日を生きるという人たちが、もはや自分はこういうふう生きようなどとは思わない人たちが、非常にたくさん出てきたのです。もう一つのグループの人たちはそれよりもっと極端にニヒリスト（虚無主義者）になっていきました。つまり、どうせ信ずるものがない以上、すべては虚構であるというふうに考えたのです。そもそも政府というもの、国というものに騙されたのだからそれも信用できないということになります。国自身が信用されなくなったわけですから、そういう中で、現にある世の中自体を否定することになるのは自然なことです。こうして、私の直前の世代の若者たちは、ニヒリストになるか、オポチュニストになるかという選択を迫られたのであります。

それに引き換え、私より後の世代、つまり、戦後になって生まれた人たちは、そういう経験をしておりませんから、同じような苦悩にさらされることはなかったと言えます。むしろ、どちらかといえば、戦後民主主義というものを信じて育ち、それを価値の基準として今日まで生きてきました。世界の平和と安定を信じ、平和でのどかな日本の中でずっと過ごしてきたと言えるでしょう。今、私の目の前にいる皆さんは、その世代に属することになります。それは、一面では皆さんにとって大変幸せなことであったと言えます。そう

いう苛酷な経験をしないで済めばそれに越したことはないでしょう。そういう経験をしなかったがために、生きるということの厳しさ、その中で信念を持って行動するということの難しさというものを体験しないで済んだというのは、ある意味ではBlessingだったのかもしれませんが。しかし、英語には“Blessing in Disguise”という表現があります。表面きはBlessingのように見えても、実際はそうではないということも世の中にはあるのです。つまり、人生の鉄火場を経験していないということは、苦勞を知らない、悩みを持ったことがないということに通じることにもなるのです。私の世代は、そういう戦後民主主義世代にも属していなかったのです。逆に言ってしまうと、私の属する昭和一桁世代は、その前の世代のようなニヒリストになったり、オポチュニストになったりしなければならないような悲惨な体験はしなかったと同時に、その後の世代のような、平和、平和と唱えていけば平和は実現する、平和を唱えている限り戦争は起こらないと信ずるような楽観主義にもなかなか与することができないのです。そういう意味では、複雑な人生経験を生きてきた世代だと言えます。そういう世代の人間であった私が、日本の敗戦という衝撃の中で感じたのは一体何が、どうして起きたのかということを徹底的に考えなければならないということだったのです。二度とこんな事態に日本を陥れないために我々は何をしなければいけないのかという問題がその後の私の人生を支配する問題になったのです。平和、平和とさえ言っていれば平和が来るわけではないということが、二つの世代間の人間としての私の人生の出発点になったということが出来ます。国際関係とは一体どういうものであり、何が世界を動かしているのか。それを動かしている人間というのは一体何者なのかということが、当時の中学生、高校生であった時代の私の主要な関心事になりました。勿論、十代の若者ですから、そんなに徹底的に、理論的に詰めて考えたわけではありませんが、そういう思いで私は少年時代というものを過ごしてきたわけであります。

Ⅲ. 国際関係と私

そういう背景があって、私が大学に入って勉強したいと思ったのは、国際関係論であり、あるいは国際法というものでした。そういうものを勉強すれば、もう少し国際関係というものはどういうふうにして動くものなのか。戦争をなくするためにはどうしたらいいのかということを考える要素になるというか、考え方の手掛りが学べるだろうと思って、大学に入ったのであります。

ところが、大学に入ってみると、そこは私が思っていたほどに親切的な場所ではなく、そんなことは誰も教えてくれませんでした。その後になって気が付いたことですが、外務省というところで自分自身国際関係というものにかかわってみるという途があったのです。外交を自分で実践して体験してみれば国際関係の実体というものがよく分かるということ

です。もう一つの途は研究者になることでした。つまり、もっと理論的に勉強を重ねていけばもう少し分かるのかもしれないということです。その二つの選択肢のうちどちらを選ぶかという選択が私にはあったわけですが、私は、実践の道を選んで外務省に入ったわけです。

外務省に入ってイギリスのケンブリッジ大学に、政府留学生として留学する機会を得ました。留学してみて強く印象付けられたのは、なるほど大学教育とはこういうものであったのかということでした。この体験は、国際法について目を開かれたというだけではなくて、およそ大学というものはこういうものなのだとすることに私の眼を初めて開かせてくれたのです。私は、ケンブリッジ大学に留学して教育の場としての大学というもののあるべき姿に初めて接した思いでした。それは、イギリスの大学というものを実際に自分で経験してみて感じたことであり、抽象的に言うて分かることではありません。具体的なことについては、のちに「大学と私」のところで話したいと思いますが、一言でいえば、大学が「教授の場」（知識を教え授けるところ）である以上に「教育の場」（人間を教え育てるところ）だということを痛感させられたのです。

さて、私が自分の仕事として選んだ外交という仕事は、多くの皆さんには直接関係ないことだと感じておられるかもしれません。しかし、今皆さんが新聞でご覧になるロシアのウクライナ侵攻はどうなっていくのだろうということになれば皆が関心を持っていることでしょう。外交というのはそのことに関わる仕事なのです。どうなっていくのだろうかということを考えるときには二つの別な側面があります。まず、戦争としてどうなるのだろうかという問題は軍事専門家の考えることです。もちろん、軍人にとって勝つか負けるか、勝つためにはどういう作戦を練らなければならないかという軍事的な戦略、戦術の問題は重要です。専門家としての軍人が、自衛隊でいえば幹部学校のようなところで専門的に勉強して考えることでありましょう。

しかし、それに先立って考えなければならないもっと重要問題は、なぜウクライナで戦争になったのか、どうしてそれが防げなかったのか、それを防ぐためには何をしなければならなかったのかということなのです。そういう問題を考えて、実践することが外交というものなのです。外交の言葉ではPreventive Diplomacy、予防外交といいます。予防外交というと、何のことかよく分からないかもしれませんが、紛争になることを阻止（Prevent）するために行う外交です。確かに、戦争が起こってからどう停戦を実現するかという問題は、人がどんどん殺されている状況では大変重要な問題です。けれどもその前にやるべきことがあったのではないかと、つまり戦争が起こらないようにするため何をやらなければならないか、関係者はちゃんとやったのかという問題です。先日、防衛大学校で現職の自衛官になるための教育訓練を受けている学生の皆さんに講義をする機会がありました。もちろん、この人たちは、戦争に備えて、いざという有事の際に戦いをどう戦うかを勉強するために自衛官になっておられるわけです。私は外交の専門家として戦争の専門家

を養成する防衛大学校の学生の皆さんにこういう話をいたしました。「皆さんは、勿論いざという有事に備えての勉強をしておられるわけですが、その一步前で戦争にならないようにするために何をしなければならないのかという問題を考えるのも、軍人になる人の非常に重要な役割です」ということをお話しいたしました。学生の皆さんは、初めはきょとんとした様子でしたが、最後にはこの両者の違いをよく理解していただき、「外交の重要性が非常によく分かった、自分たち自衛官も外交についてもっと勉強しなければいけない」ということを言ってくれました。

それは、例えば、先に触れた太平洋戦争がなぜ起こったのかという問題についても言えることなのです。何故あの戦争は防げなかったのか。何がそこには欠けていたのか。どうして外交が機能しなかったのかという問題は、すべて外交の責任に属することなのです。外務省が、あれは軍がやった戦争であり、われわれは関係ありませんというわけにはいかないのです。そういう外交を実行するために身を賭して殺されたという人も、殺されるような状況に置かれた人もいるわけであります。一例を挙げれば、5.15事件（1932年5月15日に起きた海軍によるクーデター事件）で殺された犬養毅です。総理大臣として外交のために命を落としたのです。さらに、2.26事件（1936年2月26日に起きた陸軍によるクーデター事件）の時には総理岡田啓介が暗殺の対象になり、鈴木貫太郎侍従長も襲われました。この人たちは、端的に言ってしまうと、太平洋戦争を避けるため外交上何をしなければならないかということを考えて国のために行動した人たちであり、そのために命を落としたということが言えます。同じ軍人でも、山本五十六元帥は、太平洋戦争の勃発時のハワイの奇襲攻撃の立役者として日本では英雄視され、アメリカでは悪の権化のように考えられている人です。しかし、彼はいかに太平洋戦争を避けるかということに全力を挙げて尽力した人だったのです。戦争直前の近衛内閣で海軍大臣を務めた米内光政大将の下で海軍次官を務め、大臣と志をともにして日独伊三国同盟締結の回避に努力しました。山本次官が右翼に狙われて暗殺されることを警戒した米内大臣が山本次官を連合艦隊司令長官に転出させたのは有名な話です。皮肉なことに、山本大将は連合艦隊司令長官になったがために、日米開戦に当たってそれをどう成功させるかという作戦の最高指揮官となり、真珠湾奇襲攻撃の責任者になったのです。

しかし、軍事的に見てそれが成功であったとしても、外交としてはそれが「卑劣な奇襲」としてアメリカを一致団結させ戦争終結を一層困難にしたという側面は否定できないのかもしれないかもしれません。これらは、歴史家が判断することであります。しかしそうみてくると、武力攻撃、戦争という事態になる前に、そういう事態を招かないようにするため何をなすべきなのかという見地から外交が果たす役割がいかに重要であるかについてお分かりいただけたのではないかと思います。先ほどウクライナ情勢について触れましたが、それもベルリンの壁の崩壊から、ソ連邦の崩壊、東西両ドイツの再統一という一連の歴史の流れを詳しくお話をすれば、皆さんにももう少しよく分かっていただけるのです。今日はそんな詳し

い話をする場ではありませんからそれはいたしません。皆さんにもし興味があったら、そういう問題をもっと勉強することは皆さんの役に立つ知識になるだけでなく、歴史に対する理解を深めることになると思いますが、専門家になるつもりでなければ、そこまで深く入ることはないかもしれません。しかし、そういう背景を理解することは、皆さんの教養を深め、人間性を高めることになる大切なことだということを申し上げるために、いろいろな例をお話ししたわけであります。

IV. 大学と私

ケンブリッジ大学に留学してまず感じたのは、外国に行って生活するということが異なった文化を体験するということであって、単に観光に行って1週間イギリスを見てきたというのとは違うということです。別な社会に住んでその社会の人々と一緒に過ごすわけでありますから、自分が日本で常識だと思っていたことが、実は全然常識ではないというような事柄に度々出くわすわけであります。そういう経験をするのが、外国に留学することの非常に大事な点なのです。

そういう中で、ケンブリッジ大学で勉強して初めて実感したのは、大学という所が単なる教授の場ではなくて、教育の場であるということでした。皆さんは、教授と教育ということは同じような言葉だと思っているかもしれませんが。しかし文字を見てお分かりのとおり、教授というのは、「教え、授けること」授けるというのは持っているものを分け与えるということです。つまり、知識を与えてあげるのが「教授」であります。これはもちろん大学の一つの重要な役割であります。しかし、もう一つの、恐らくもっと大事な大学の役割というものは、教育ということなのです。それは「教え、育む」ということ。育むというのは、未熟な人を育て上げ、一人前の人間に仕上げるということです。育むための糧を与えることが教育であるということが出来ます。そして、教育ということが教授ということと並んで大学の二つの重要な使命であるということが、イギリスに行ってみて初めて実感することができたのです。そして、そこでは、大学というものが社会の中軸となる人間を養成するという成熟した社会に不可欠な使命を果たしているのだという重要なことを私に気づかせてくれたのです。

このことは、今の日本にもかなり当てはまるのではないのでしょうか。日本では、大学の先生方は、些細なことに不必要な時間を費やすことを強いられることが多いように見えます。もちろん、研究者として研究業績を上げなければならないことはいうまでもありません。しかし、それと同時に、これから伸びてゆく若い皆さんを教え育てることによって、立派な人格に育て上げていくことも大学の大きな使命であることが忘れられてはならないと思うのです。この二つのことを実践することが大学の在り方として非常に大事なことな

のではないのでしょうか。

大学といっても、Undergraduate（学部）の4年間とGraduate（大学院）の3年間ないしは5年間というものではその使命に大きな違いがあります。私はその後、アメリカのハーバード大学で教える機会がありました。そのときの経験から感じたことも同じでした。ハーバード大学は世界一の大学だと言われますが、ハーバード大学には、2つの構成要素があります。一つはHarvard College と呼ばれる部分で、ちょうど名桜大学の皆さんと同じように、アンダーグラデュエートとして4年間を過ごす教養学部（Faculty of Arts and Sciences）です。それも含めた分野でさらに専門的な勉強をする大学院（Graduate Schools）があり、それらが一緒になってHarvard University を構成しているのです。医学部、法学部、神学部などはすべてこの段階の大学院にあたります。この段階では、研究者を目指す人たちや、医者、法律家、あるいは神父などの専門家を目指す人たちが深い専門教育を受けることになります。ここでは研究ということが非常に重要になります。しかし、アンダーグラデュエート4年間をHarvard Collegeで過ごした人も、社会に出て職業人として仕事をするわけです。研究の道を選ぶ人はさらに大学院へ行って研鑽を積むわけですが、そうでなく会社員、公務員、ジャーナリストなど、いろんな形の職業に就く人もたくさんおります。そういう社会の中核になる人たちが社会に出たときに役立つ人間をどう育てるのかということが大学にとって重要な使命なのです。ハーバードの例で申し上げますと、この4年の課程では一定の必修科目（Core Curriculum）を履修することを条件として、何をやってもいいのです。例えば、人文系に進む学生が、高校で化学が好きだったから引き続き化学を勉強するということも可能です。私の長女はHarvard Collegeで高校のとき非常に好きだった化学の単位を取ったりしていました。要するに数学をやってもいいし、経済学をやってもいいのです。国際関係論入門を勉強するというのも、当然その中に入るでしょう。中には、フォトグラフィーをやるなんていう学生にも私は会ったことがあります。そのなかで何を中心（Major）に勉強するかが自ずから決まってきます。それは特化（Specialization）ではありません。特化（専攻）は大学院レベルに進んでからもっと専門的に医学だとか、法学だとか、あるいは神学だとかといった特定の分野の専門家、スペシャリストを養成することに目的があるのです。それに対して、アンダーグラデュエートで何を勉強したかということを米国ではMajor、英国ではReadという表現で呼ばれます。ここで一番大切なのは、こういういわば一般教養科目ともいえる授業がその分野で世界的に著名な教授が自ら教壇に立って教えるということです。つまり、自分の一番関心ある分野を中心に勉強した（Major）ものが経済学であれ、国際関係論であれ、それについて碩学と呼ばれるような大先生の「警咳」に接してその「薫陶」を受けることができるということが大切なのです。今はやりの言葉で言えば、リベラルアーツと呼ばれるものの本質はそこにあると私は感じました。言葉の起源にこだわっていえば、リベラルアーツというのは、古代ギリシャで自由人が備えるべき学識として発展した人文・

自然科学分野計7つの徳目だとされます。しかし、そんなことはどうでもよいことなのです。大切なのは、それらが古代ギリシャ文明においては社会の中で教養ある人間として生きる、社会の中で貢献できる人間として生きるために、身につけるべき徳目だったということなのです。その7項目が今日も同じである必要は必ずしもありません。それが文学でも、歴史でも、あるいは国際関係論でも何だっていいのですが、そういう徳目について、広い視野を持った熟達の達人から薫陶を受けるということが人間としての考える力、創造する力を養うことになるという考え方なのです。それはさらに専門課程に進んだときにも役に立つことになるでしょう。それが肥やしになって専門のことに深く入る上で役立つという考え方なのです。

最近の物理学や生化学の先端分野の話を聞いていると基本的なことあるいは原理的なことに立って考えることが理解を助けるという経験をすることがよくあります。例えば、デジタルというと難しいことに聞こえますが、デジタルという概念は基本的には算術に始まっていることがわかります。それが少し複雑になれば数学になります。そういうものの基礎が分かっているれば、デジタルの分野で仕事をした際に専門家でなくても、仕事に必要な理解力を磨いていくことはできるのではないのでしょうか。理解力の基礎を養い、社会の重要な一員となりうる人間としての能力を養う教育がリベラルアーツと呼ぶに相応しいのだという風に考えていただければよいのだと思います。



学生たちとのワークショップ「小和田恒先生と語ろう」

皆さんが卒業後にどういう職を選ばれるにせよ、例えば名護市役所や沖縄県庁に勤める地方公務員になる場合、中央官庁例えば外務省で仕事をする国家公務員になる場合、企業に入って会社員になる場合（それが銀行であれ、証券会社であれ）、あるいはジャーナリストになる場合など、それぞれに多種多様な仕事の基礎となるような基本常識、判断力、洞察力というものは、皆さんが大学にいる間に身につけておくことが必要なのです。そこで求められるのは、「何を知っているか」という「知識」ではなく、「どう判断するか」という物事の本質を見抜く「洞察力」なのです。そのうえで自分は特にこのことを深く知り

たいと考えて専門的な知識を深く勉強するのはもちろん結構なことです。その場合でも、それを可能にするのは一人の人間としての基礎をしっかりと養っておくことだと思います。そういう「教育」を行うことが知識を授ける「教授」と並んで、大学の重要な使命として大切なのだということを学生の皆さんも教育に当たられる先生方もよく考えていただきたいのです。このことを、私は学生として過ごしたケンブリッジ大学における学生としての4年間と、教授として過ごしたハーバード大学での2年間の自分自身の経験から強く感じるのです。私がアメリカやヨーロッパの大学で過ごした経験を通じて感じるのは、大学はどう学生を練磨するのかという問題でした。「練磨」とは、学生が「教授」によってどれだけの知識を得るかではなく、学生が「教育」によって人間としてどれだけの成長を達成できるかということなのではないでしょうか。今日の私の体験に基づいた話が皆さんにとって自分の将来を考える上で少しでも参考になればと思います。

最後に、教育で一番大事なことは何かということについて申し上げようと思います。それは「自分で考える力」を育て、養うということではないかと私は考えております。例えば、何か受け入れがたいようなことが起きたとき、新聞にそう書いてあるからそうだったのだと受け止めるのではなく、本当にそうだったのか、そうは言うけれどもその前にやれることがあったんではないか、そうならないためには何が必要だったのか、というようなことを考える力を身につけて初めて物事の本質を見極める力が養われるのです。新聞記事に嘘が書いてあると言っているのではありません。新聞の記事が事実を正確に書いていることはその通りでありましょう。SNSは別として、一流の新聞に書いてあることに嘘があるとは申しませんが、嘘は書いてなくても新聞は現にこういうことが起きたという事実は正確でも、なぜそれが起きたのか、それを防ぐにはどうすればよいのか、起きてしまったことにどう対応したらいいのかということについては、書いた記者の判断、主観が入ることは避けがたいことです。新聞を材料として、そこから先は皆さんが自分の頭を使って考えなければならないことなのです。その力を養うことが大学で先生が果たす使命であり、皆さんが大学で教育を受けることの意味なのです。皆さんは、先生の言ったことを鵜呑みにして、ノートに取り、それを試験のときに再生して先生の言ったことを書けば100点をもらえるかもしれません。しかし、それが大学の教育の本質ではないのです。教わったことを材料として、自分で考えることが皆さんの役目なのです。知識を材料としておきながら自分の意見というものを創っていくことのできる人間が揃った社会になれば、われわれの社会は立派な社会になっていくのです。

V. 国際裁判所と私

私は、私の人生最後の仕事として、国際裁判官という仕事を選び、推されてオランダの

ハーグにある国際司法裁判所で国際裁判官として主権国家間の紛争を解決するという職を15年間勤めました。皆さんご存じかもしれませんが、国際司法裁判所というのは、世界にただ一つだけある常設の国際裁判を行う裁判所です。この裁判所は、個人と個人の争いを裁くのではなくて、国と国との間の紛争を解決する機関であり、1920年に国際連盟の傘下で独立の国際機構として設立されました。今日では国際連合の主要機関の一つとして国際社会唯一の司法機関となっております。

先ほども紛争を防ぐにはどうしたらいいかという問題には、外交というものが大切だということをお話ししましたがけれども、紛争の解決には、外交と並んで、紛争を処理する国際的な司法機関の存在が不可欠です。それは国内のことを考えてみれば、すぐお分かりになると思います。国内でも、隣の人の間で争いがあるとか隣の村との間で争いが起こることは度々あることです。そういう時に、初めは話し合いで解決しようとしします。話し合いで解決しようというのは、先ほどの国と国との関係で言えば外交によって問題の処理を図るということに他なりません。しかし、国と国の紛争については、事はそれほど簡単ではありません。

19世紀半ば頃までのヨーロッパでは、クラウゼヴィッツというナポレオン時代の戦略家が言った表現を使えば、「戦争は外交の形を変えた延長である」という考え方が罷り通っていました。つまり、戦争と外交というのは別物なのではなく、外交をやってもうまくいかなかった時には平和的な手段である外交に代えて、強力的手段、強制的手段、つまり武力という手段によって解決することが許されるという考え方があります。戦争というものは外交の延長線上にあるものだということを言っているわけであります。こういう考えは、19世紀までは許される考え方だったのです。因みに今プーチンがウクライナでやろうとしていることは、まさにクラウゼヴィッツが言ったことを地でいっていると言えます。外交でウクライナ問題を解決できなかったがゆえに、武力でこれを占領ないし併合しようとしているからであります。

この問題は、何故人間は社会を創ったのかという根源に遡る問題です。人間はいかなる目的で一緒に集まって一つの社会を創ったのかという問題です。人間は、基本的には動物です。基本的に動物である一面を今でも持ってるわけです。そういう原始状態の人間の在り方を考えたイギリスの政治哲学者ホブズという人は「人間は人間に対して狼である」、つまり、原始の状態では人間は他の人間に対していつでも食いつくことのできる一匹狼の存在であるということを言ったのです。しかし、そういう弱肉強食の世界では、強い者は勝つかもかもしれませんが、本当に幸せな世の中が来るわけではない。そこで、人間は、社会というものを創って共存することによって人間共通の利益というものを守ることにしたのだということなのです。それが人間社会というものの起源にある考え方であるというホブズの説に基づいて、フランスのルソーや、イギリスのジョン・ロックなどという哲学者が唱えたのが社会契約説という考え方です。社会契約説というのは説明であって、本当に

歴史的にそういうことが起きたのかどうかは分かりません。しかし、現状を説明すればそういう理論づけになるだろうということは、確かにそのとおりだろうと言えます。つまり社会ができたことによって、人間は動物である状態を脱して、理性的な存在の集団になったということになります。

しかし、人間は動物的な側面を今でも持っているために争いが起きることになります。そういう本能を抑えて、みんなが仲良く暮らす社会を創ろうということで、国内社会というものができてきたわけです。それが国家というものの起源だということになります。国家ができれば、国を治めるための組織というものが当然形成されます。統治するための組織は統治者に権力を集中して、統治者が国民の意思、社会の構成員の意思に基づいて、正しいこと、間違っただけを判断し、あるべきこととあるべきでないことを決定して、それによって政治を行い、裁判を行うことになります。したがって、統治権能を与えられた統治者が決めたことには、被統治者は従わなければならないことになります。裁判所の判断には国民は従わなければならないということによって社会の秩序が維持されているという国内社会秩序の構造が生まれてくるわけであります。

これに対して、国際社会は残念なことにそういうプロセスは経てこなかったのです。近代国際社会がどういうふう形成されたかについては、いろんな説がありますがけれども、歴史的に言えば、17世紀半ばの1648年、北ドイツのウエストファリアという場所で大きな講和会議が開かれたのが起源だとされます。これは「三十年戦争」(1618年—1648年)と呼ばれるヨーロッパ全体を巻き込んだ一大戦争に終止符を打った平和会議でした。宗教改革によって起きた新教と旧教の対立から領主が割拠していた当時のヨーロッパの国々の間で、カトリック派とプロテスタント派との間で殺し合う戦争が行われたのです。

宗教対立がどれほどすさまじかったかは、例えばいち早く新教に改宗したオランダでは、カトリックの教会は破壊され、今でも教会としては残っているカトリック教会は新教の教会に代わっております。そこに行きますと、そこに祀られたカトリック聖人の像は、みんな首から上を全部ちょん切られて破壊されております。それはこの宗教戦争の時代にみんな破壊されたものが一部残っているのです。いかに宗教戦争というものが激しいものであったかということを見ていただければ、皆さんが歴史を理解する上で非常にプラスになると思います。それぐらいに激しい戦争が、30年にわたって継続的に行われた。1618年から48年までの30年間続いた後それを収めたのが、ウエストファリアの講和と呼ばれるものです。そこで、宗教対立を無くすための平和というものが初めて達成され、近代ヨーロッパの平和というものが訪れたのです。その結果生まれたのが、主権国家を基準とする国際秩序という考え方だったのです。ウエストファリア体制の原理は、主権国家が国際社会の構成員であり、これら主権国家はすべて独立な存在であって平等な存在であるという原理です。そこから一国が他国の内政に干渉することは許されないという内政不干渉原則が生まれます。そして、それが今日も国際秩序というものの基本になっています。しかし、

それでも同じ主権平等といっても、強国と弱国は事実として存在するわけですから、先ほどお話ししたクラウゼヴィッツのような考え方は依然その後も残っていたわけです。そういう流れの中で、それでも戦争は野蛮なものであり無くすべきである、直ぐに無くすことはできないにしても、戦争で非人道的な手段を使うことを禁止すべきだという考えが生まれ、今日「国際人道法」と呼ばれる一連の条約が19世紀末以来作られて今日まで続いているわけであります。戦争そのものを禁止すべきだという考え方が生まれたのは、第1次大戦が終わってからのことです。1928年に不戦条約というものが作られます。国の政策遂行の手段として、戦争という手段を使うことは禁止するという条約です。国際連合憲章第2条4項にある武力の行使の原則禁止の規定は、その延長線上にあります。原則禁止の例外として認められるのは、この武力行使禁止に違反する加盟国に対して国連安全保障理事会が決定する強制措置の場合に加えて、各加盟国が自衛権を行使する、自分自身を守るための武力行使の場合だけであり、その自衛権行使も安全保障理事会に直ちに報告しなければならないのです。ですから、法規範としては戦争は違法な行為であるということになっているわけです。それにもかかわらず、強いものが武力をもって秩序を壊そうとすればできないわけではない。それは、先ほど申し上げたように、国内のように権力というものを行政的にも司法的にも統治者（組織）に集中して、それが被統治者からなる社会全体をコントロールするという他律的制度（ヒエラルキー）ができていないからです。ウエストファリアの講和で採択された原則は、まさにそういう他律的秩序を排した自律的秩序（アナルキー）であったからです。主権平等というのは、いわばホッブスの原始社会と同じように主権国家が主権国家に対して狼でありうる社会という側面を持つのです。それをそのままに認める国際社会では、「秩序ある社会」は生まれません。そこで、自律的な手段（国際条約）によっては武力行使を禁止するということを規範として合意したという状況下では、この規範を適用し、執行する司法機関の存在が不可欠になります。そこで国際紛争を国際法によって解決する機関として国際裁判所が第1次大戦後の国際連盟の時代に設立されたのであります。

そういう国際環境の中で起きたのが、プーチンのロシアによるウクライナ侵略であります。例えば、これがユーゴスラビアで起きた事件であれば、主要な大国、ロシアを含めて、アメリカも、イギリスも、フランスも中国も、安全保障理事会5常任理事国すべてが一緒になって、ユーゴスラビアで起きている紛争を解決するために一致して行動することができます。（現にユーゴ紛争はこうして解決されました。）また、戦争犯罪を行ったり、ジェノサイドを行ったりした個人を犯罪人として処罰するための裁判所も設立され処罰されたわけです。

ところが、今度のプーチンがウクライナに対してやっていることと、ユーゴスラビアで起きたこととはどこが違うのかということになりますと、本質的に起きていることの内容にそれほど違いがあるわけではないとも言えます。両者の決定的な違いは、ユーゴスラビ

アの場合は、それを実効的にする国連安保理の枠組みというものが曲りなりにも機能したのに対して、ウクライナの場合には、安全保障理事会の常任理事国の一つであり、国際連合の集団安全保障体制の生みの親の一つであるロシアがこの仕組みを破って侵略行動に出ていることにあります。共通のコンセンサスがなければ世界の秩序が保たれないという世界の中で、コンセンサス形成の中核になるべき立場にある国がそれを打ち破ろうとすることになったら、その秩序は簡単に破壊されるということを意味しているのです。それにどう対応したらいいのかという話になると、話がだんだん専門的になりますから、今日の話はそのぐらいにします。

国際司法裁判所というのは、今お話ししたような性格を持った国際秩序の枠組の中で、大変重要な役割を果たしていると言えます。分かりやすい実例では、マレーシアとシンガポールの間にある島の帰属をめぐる両国間の紛争の例が挙げられます。この島は、イギリスがシンガポールを植民地として支配していたときから、そこを通過して中国からイギリス、ヨーロッパに茶の輸出に当たる船が、シンガポール海峡からマラッカ海峡を抜け、インド洋を経てヨーロッパに達する海上交通の要路に存在しています。

シンガポールとマレーシアが第2次大戦後独立した際に、この両国間の海峡にあって灯台しかない無人島がシンガポールのものか、マレーシアのものかということが両国間で争われることになりました。この問題は、双方の国が独立して以来ずっと長いこと紛争の対象としてきたという点で、日本と韓国との間に紛争の対象として存在している竹島と同じように、シンガポールとマレーシアの間で長い間紛争として両国が分離独立して以来交渉しながら、外交的手段では解決できない状態が続いていたのです。仮にマレーシアの方が地理的には大国であり、強い武力を保持しているとしても、マレーシアは武力を使って占領するという強力手段に訴えることはせず、両国は外交努力を重ねました。そこから先が竹島の場合と違うのですが、マレーシアとシンガポールの両国は、双方の懸命の努力にもかかわらず自分たちの外交の力では解決できず、他方実力行使に訴えることは両国の基本的利益に反するという姿勢を崩さず、両国の共同合意によって国際司法裁判所への提訴に踏み切ることにしたのです。ここでは両当事者の主張、反論などの細部にわたる法律論の詳細にわたることは控えますが、国際司法裁判所は、この島は当事者間の歴史的な接触経緯から判断して、法的にシンガポールに帰属する島であるという判決を下したのです。この判決を両国が受け入れた結果、この紛争は両国の実力行使に至ることなく解決し、その後も両国関係は良好に推移しているのです。

ちなみに竹島の問題について一言付言すれば、日本と韓国との間では日本は自分のものだと主張し、韓国は、韓国のものだと主張する中で争いが50年続いているわけです。しかも外交的には解決がつかないのみならず、その間に、韓国は誰もいない無人島である岩礁に自国の部隊を派遣して、これを事実上占拠しており、その結果現状は韓国の事実上の支配が続いています。もちろん、この紛争が両国間の紛争として存在して以降に執られた

この措置は国際法的には意味のないことですが、この問題の解決のために日本・韓国いずれも武力行使に訴えようという姿勢は見せていない状況の中で、解決の見通しはなかなか立たないというのが現状だと思います。日本は、韓国に対して、この島の帰属問題を国際司法裁判所に付託して国際司法裁判所に決定してもらうというマレーシア・シンガポール方式を提案したようですが、韓国がこれに応じていないというのが現状のようです。先ほど申し上げたウエストファリアの原則から言えば、同意を与えない相手国を裁判所に引き出すわけにはいかないのです。国内社会であれば、隣人との間で境界線争いが起きた場合、隣人を裁判所に訴えれば、隣人がイエスと言おうが、ノーと言おうが、裁判所はその事件を裁判に付託して判決を下し、さらにこの判決を執行することができるわけですが、国際社会ではそういう仕組みは存在しないのです。

それにしても、マレーシア・シンガポールの例が如実に示しているように、国際司法裁判所が国際社会の司法機関として極めて重要な役割を果たしていることがお分かりいただけたことと思います。そういう重要な場所で仕事ができたとすることは、私にとっては大変幸せなことでした。私の人生に通ずる思いとのつながりということ言えば、この15年間は、外交で実践してきたことや、大学で教えてきたことの延長線上にある仕事としてこれをやり遂げてきました。そのことを具体的に分かっていただくために、国際司法裁判所がどういうところであり、何をやっているのかということについて、若干の例も交えてお話したわけです。

つまり、そういう意味でみれば私の90年の人生を支配してきたのは、結局、あの敗戦の体験であったということが出来ます。それが私の一生を決めたと言ってもいいくらい大きな印象を残したのです。皆さんは皆さんなりに同じような体験をお持ちだと思います。もっと小さい体験かもしれないし、もっと大きい体験かもしれませんが、そういう体験があるとすればその体験を大事にして、皆さんがこれからの人生を何のために生きるのか。生まれてきたからには、しっかりと生きるに値する生き方をしてほしいと思います。そのために自分にできることは何であるかということ、大学生の間によく考えて欲しい。大学生活の4年間というのは、そのためにあるんだというふうに考えていただいていいと思うくらいです。

VI. 沖縄と私

最後に、なぜ私が沖縄の名桜大学でこういうテーマでお話をするのかということに触れたいと思います。先ほど砂川学長からも紹介がありましたように、私は沖縄に生まれた人間でもなければ、沖縄で生活をしている人間でもありません。沖縄とは何の関係もない人間であるとすら言えるかもしれません。しかし、私は、沖縄という土地を知れば知るほど、沖縄の歴史を知れば知るほど、沖縄が日本の領土であり、日本という国の一部であること

を実感するのです。同じ日本人として皆さんと一緒に生きていくこと、日本という一つの社会の人間であるということから、日本の国全体として、沖縄の人だけではなく、東北に住む人も、北海道に住む人も、中国地方に住む人も、九州に住む人も、みんな一緒になって同じ同胞として、沖縄の将来ということを考える責任があると私は思うようになってきたのです。その体験の背後にあるのは、先ほど砂川学長がお話しになったような、1972年5月15日の沖縄返還の式典に参加した経験です。それからのちも私は外務省で沖縄の問題を担当する局長になって、沖縄が現在どういう状況に置かれているのか、どういう問題を抱えており、それらにどう立ち向かうべきなのか考える立場に置かれた1980年代の経験が背景にあって、今お話ししたような考えになっていったのだと思います。

分かりやすい例で言えば、日本では最近の東北大震災を他人ごとと思ってただ同情するのではなく、あの人たち（被災者）に我々がもっと寄り添い一緒になって困難に立ち向かわなければならない問題が残っているということで、国全体を挙げての努力が行われています。それは大変いいことだと思うと同時に、それは東北大震災に限ったことではなく、また熊本に限ったことでもない。あるいは阪神淡路大震災に限ったことでもないという動きが広がっています。沖縄についても同じことが言えるのではないのでしょうか。みんなが一緒になって沖縄の未来をどう考えるかということを国民的な運動として起こしていかなければならないのではないかと感ずるのです。

今年は沖縄の本土復帰50周年に当たります。その50周年を契機としてそういう運動を盛り立ててほしいと思うのです。その動きは、沖縄の人が声を上げなければ本土の人は気が付かないのかもしれないのです。沖縄の未来についてのアイディアが沖縄から出て来ることが大切なのです。同時に、これは沖縄だけに任せるべきことでもありません。沖縄の問題だから沖縄が自分で解決しなさいという話ではないということを我々全体が皆さんと一緒に考えることが重要なのです。それでは何ができるかということになるといろいろ難しい問題はあります。政治の問題もあるし、経済の問題もあります。いろんなことがありますけれども、今一番大切なのは、そういう気持ちをもって、何ができるかについて一緒になって考え、企画し、実行に移すということではないのでしょうか。

沖縄がアメリカの施政権下に置かれていた戦後27年間の軛からようやく放たれて、日本の一部として帰ってきたということは、非常に大きな一歩でありました。けれども、その後その一歩をさらに一歩進めるための努力というものが一時期を除いて見えなくなっていたように感じます。一時期というのは、橋本内閣、小渕内閣の時代です。その時期に我々がやったことを超えて、さらに進めていこうという努力がなされなければいけないのではないかと私は感じるのです。そのとき一番大事なことは、ここにおられる皆さんの中には沖縄出身の方でない方も多数おられると思いますが、それは沖縄の問題だということではなく、日本全体の問題として一緒に考えなければならない問題だということではないのでしょうか。例えば、皆さんが新潟から来ていても、宮崎から来ていても、北海道か

ら来ていても、一緒になって考えてほしいのです。それは何かといえば、沖縄の未来はどうあるべきかということであり、明るい沖縄の未来をどう具体的に築いていくかを具体的に描くことだと私は思います。それが一番大きな課題だと私は思います。

もちろん、沖縄が基地問題という非常に難しい問題を抱えていることは事実であります。特に最近のウクライナ情勢、中国の動向、北朝鮮情勢などを考えると、日本の安全保障を日本自体の問題としてどう確保していくのかという問題は、日本国民全体にとって非常に大きな問題であるということがますますはっきりしてきている中で、沖縄の基地というのが不要であるというような議論ができない客観情勢の変化が出てきていることは、何人も否定できない事実なのではないでしょうか。

もちろん、それは沖縄の基地が、今のままでよいということを意味するわけではないでしょう。日本自体の安全保障をめぐる新しい戦略状況を考慮して米軍基地をより合理的に再整理することができないのか、基地配備の負担をもっと全国で分担することができないのかというようなことを含めて考えるということが必要でありましょう。しかし、それらの問題は、現状を見直して懸案を解決するという後ろ向きの話です。「後ろ向き」という言葉は誤解を招くかもしれませんが、より大切なことは、これからの沖縄の明るい未来の展望を開くことではないでしょうか。沖縄の将来像をどう創っていくのかという問題を皆さんと一緒に考え、努力することが同じぐらい重要な問題として出てきていることに皆さんが思いをいたしてほしいのです。

私は沖縄のことをそれほどよく知っているわけではありません。「明るい沖縄の未来」をどう築いたらよいのかという具体論は、沖縄の皆さんが本土の専門家の人たちと一緒に知恵を出し合い相談しながら決めていかなければならない問題です。私には自分の思い付きを申し上げる以上のことはできませんが、全くの私見としてこの「骨子案」に書いておきました。私にできることは、私案としてここに書いたような、「明るい沖縄の未来」建設のための具体案をお示しして、沖縄の将来を背負う若い皆さんにそのために何ができるかということを考えていただきたいということにつきます。その一つは、沖縄の置かれている地政学的な状況—これは、申し上げた安全保障上の問題だけではなく、日本の最南端に位置している沖縄が日本という国と東南アジアの国々とを結び付ける最先端の地位にあるという意味で、地理的に有利な場所を占めていることを含みます—をどう活用するかということに関連します。昔のように重厚長大型産業は、鉄鋼にせよ、石炭にせよ、それらが産業の中心であった時代には、沖縄に持ってくる場所もないし、人もいないという話になったでしょうが、今やIT産業が中心になったり、あるいは、デジタルの世界が企業の中心になっているような時代には沖縄に持ってこれない産業などはないのです。環境汚染をしない沖縄にふさわしい産業があるはずだと思います。そういう産業分野を、どういうふうにして沖縄に持ってきたらいいのか。それは、沖縄が魅力あるインフラと人材を用意することによって可能になるはずで、それが骨子案VII（1）に書いた諸点に関わって

くるわけです。広大な土地があるとか、水があるとかというようなことだけが、産業誘致の重要な条件でなくなってくる時代には、質のいい人材が揃っていて仕事をしてくれるかということが重要な問題になります。沖縄が人材養成に力を入れて人材はたくさんいるということになってくれば、多様な企業が集まってくるでしょう。皆さんご存じかどうか知りませんが、アメリカの今の金融業、銀行、証券などのデータベースの処理は、多くの会社がインドでやっているのです。昔ならアメリカの金融界がデータベースの本部をインドに置くなどということは考えられなかったでしょう。しかし、通信手段がこれだけ発達した今日、世界を相手に24時間体制で働くアメリカの銀行、企業にとってはデータベースがインドにあって本国のアメリカの銀行がインドと直結しながら業務を行うことは決して不利なことではないのです。同じように日本でも、企業の中核を東京に置いておく必要はなくなりつつあることは、今度のコロナ危機ではっきりしたように思われます。そうであるならば、会社のデータ部門を沖縄に誘致するということも考えられないことではないではないでしょうか。ただ、それを沖縄に誘致するためには沖縄が他の所に比べて利点を持っていることが重要になります。

その関連で重要になってくるのが人材育成という問題です。人材育成というのは、先ほどお話ししたようなリベラルアーツ的なもの、どこの社会に出てどういう仕事をしても役に立てるような適応能力を持った人材を育てる大学というものが必要であるのと同時に、IT産業とか、データベースとかいうものを処理する人材ということになると、そういう面に特化した専門家も必要になってきます。それは、そういう分野に特化した工業高校とか、工業高専、大学というようなものが非常に重要になってまいります。一例を挙げますと、先般の東北大震災のときに、非常に興味深い事実が明らかになりました。私も知らなかったのですが、東北で大震災が起きた時、トヨタ自動車が製品を出荷できなくなったとか、キヤノンが出荷できなくなったとか、あるいはNECが出荷できなくなったとかいう話がたくさん出てきたのです。その背景にあるのは、東北大震災で被害を受けた工場の中には、トヨタその他の大企業の下請けをやるIT関連企業が近年東北地方にたくさん出現していたということなのだそうです。なぜ東北地方にそういうものが、いつの間にできていたのかと言うと、一番大きな要素の一つは、私はそれが全てかどうかは知りませんが、岩手県立大学工学部が非常に優秀な人材を輩出していたことなのだそうです。岩手県立大学工学部の卒業生は、東北地方出身の人間が多く、卒業後地元で仕事をすることが多いのだそうです。何故そういう人材が育ったのでしょうか。その背景の一つに、半導体の世界的権威である東北大学総長を務められた西沢潤一博士が岩手県立大学学長に就任され、この大学工学部を抜本的に充実強化してIT分野の人材養成に尽力されたということがあつたと聞きました。これはまた聞きの話でどれだけの真実性があるのかは保証の限りではありませんが、人材があれば企業は喜んで出てくることは事実でしょう。人材育成ということとは、その意味で、先ほどのリベラルアーツ的な人材が、何でも応用できる万能型の人間が

たくさん出てくると並んで、専門性を持ってきちっと仕事のできる職人的なレベルの人たちがたくさんいるということは、地域の活性化にもものすごくつながっていくのではないのでしょうか。

産業の例を一つ挙げましたが、もう一つの例として皆さんに投げ掛けたい質問として観光分野があります。沖縄は誰が見ても豊かな環境資源に恵まれた土地です。観光業が沖縄にとって重要なことは誰でも分かるでしょう。事実、沖縄には、たくさんの立派なホテルができています。しかし日本には、アメリカにあるようなホテル学部とか、観光のことを専門に学ぶ観光学部というものが脆弱だと言われます。理論的研究というよりは、観光の見地からのホテル・マネジメントという問題です。観光振興のインフラとして何をしなければいけないのかとか、ホテル経営としてのマネジメントをどう学ぶのかということについて研究、教授する大学、学部がないのが日本の観光産業の弱点だということを欧米の専門家から聴いたことがあります。私はその分野のずぶの素人ですからこの指摘がどれだけ当たっているのか判りませんが、例えば、アメリカにはコーネル大学に有名なホテル学部があって、そこはまさにそういうことを専門に勉強できるところです。ヨーロッパでは、ローザンヌにホテル専門家を育成するための専門学校が、またオランダにはハーグに同種の専門学校があります。そういうものが日本にはないために、外資系企業や東京でうまくいっているホテルが沖縄に進出してホテルを造るけれども地場産業として成功するものは少ないといわれます。確かに、ホテルを造るまでは資金さえあれば誰でもできるけれども、マネジメントして、うまく観光産業として育て上げるにはノウハウが必要でしょう。例えば、フランスのリビエラのニースやカンヌのように、そこにあるホテルが何十年にわたって繁栄するのは、単に立派な建物があるからではなくそのホテルを維持するマネジメントが優れているからかもしれません。繁栄を永続させるためには何が必要なのかということを経験した専門家が経営しているからです。沖縄について、そういうことが起きているかどうかは、私には判りませんが、観光産業も沖縄の特性を生かした分野であるとすれば、例えば名桜大学にはホテル観光分野の大学院があるわけですから、それを充実させ人材を育成するというのも検討に値する分野ではないかと思います。

VII. 結びとして

時間が来たようであります。最後にもう一つだけ申し上げたいのは、先ほどは、日本の最南端に位置している沖縄が、東南アジアとの結び付きを深める上で、経済的なつながり、産業的なつながりの話ばかりをしましたけども、もっと重要なことは沖縄の持つ文化的な親和性だと思います。つまり、東南アジアの国々と沖縄とが持っている共通な環境条件の下で、これらの地域との文化的なつながりを深めていくことが重要だと考えます。沖縄を

そういう特性を生かした比較文化研究のための協力の中核として発展させていくことは、「明るい沖縄の未来」を築く上での重要な指針となるものと信じております。

この分野で沖縄が果たす役割としてできることはたくさんあると思います。これは沖縄一人でやるのではなく、日本の一部としての沖縄、日本の最南端に位置する沖縄が、日本のために何ができるかという見地から考えるべき問題でありましょう。東京の中央政府と沖縄とが心をつなげて進めていくことが大切になります。例えば、ハワイには東西センターという文化交流の発信基地がありますが、それと同じようなものを創ることが現にAsia Pacific Multicultural Center (APMC) 設立構想というものが沖縄の文化人中心に進められております。ハワイの場合は、西海岸のアメリカとアジアとを結び付ける国立東西センターがありますが、沖縄の場合には、東西センターというよりは南北センターと言ったほうがよいのかもしれませんが。北にある日本、韓国、中国、台湾、北朝鮮といった地域と南にあるベトナム、タイ、フィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシアといった地域との間で、多文化交流、比較文化研究を進めていくための中核を沖縄に置くという考え方は、この構想を進める上での一つの重要な指針になると思います。

例えば、既にJICAの研修センターが沖縄にあります。これを研修センターだけではなく、もっと広い開発問題についての事情の調査・研究と、開発協力を推進するための方策について研究するものも一緒にそこに置けば、単に研修して訓練するだけではなく、研究をするという組織のグレードアップにもつながります。例えば、私が骨子案で触れた協力分野としては、開発分野、観光インフラ整備の分野、医療・看護、介護の分野などでの協力の可能性があります。

最後に申し上げたいのは、これは既におやりになっていることですが、名桜大学で観光に大学院の修士課程（観光環境教育研究領域）を創られたこと、もちろんこれは、大変いいことだと思います。今度のコロナ禍の問題でも非常にはっきりしたことですが、沖縄は離島が多いということもあって、医療の普及力、水準の話をしているのではありません。普及度は、他の県に比べて遅れている。それが今度のコロナの伝播についても、一つの障害になっており、これは、お医者さん、看護師さん、介護士さんというような人たちを、もっと専門レベルにおいて養成していくことは、沖縄の特性として重要であります。それは、沖縄の需要を満たすだけでなく、東南アジアの国々に対しても、そういう訓練をして、そういう人たちを創っていったらいいと思います。本土だって、そういう学校がたくさんあるわけではありませんから、そういうものを創っていくということは、沖縄の将来に向かって開かれた道として、非常に重要な可能性として申し上げておきます。

以上、四つぐらい、私の全くの私見になります。素人が何を言うかと言われるかもしれませんが、そういうことを皆さんもぜひ一緒になって考えていただきたい。それが、私が名桜大学に学ぶ若い人たちに対して期待していることとして申し上げたいことであります。時間をこれ以上超過するとご迷惑になりますので、話はここで終わりにしたいと思います。

ます。

なお、配布骨子案VII（2）に書いた項目は2018年にもお話をしたことでありますので、今日は省略いたします。（もし必要があれば、そのときのビデオが撮ってあるようですから、ご覧になってください。）若い人たちに望むこととして、ここで私が『四つの愛』ということをお大事にしてくださいと申し上げたいのは、ここに書いてあるIntegrity、Insight、Imagination、Individualityということなのです。その具体的な内容についてはビデオをご覧いただきたいのですが、これは、私が皆さんに人間として立派な人間になるために大切にしてほしいと考える徳目なのです。私は、皆さんがこの大学で学ぶにあたってもこの四つの徳目を常に念頭に置いていただきたいと考えているというのがこれを掲げた趣旨です。

今日の話の冒頭部分（枕）で、落語のつもりで聴いてくださいと申し上げましたが結びの部分の『四つのI』というのは、落語で言えば、「落ち」に当たるのだという種明かしをしておきます。つまり、ここで「アイ」というのは、愛情の愛とIという接頭文字をあわせたもので、その四つのことを「愛する（大切にする）」ようをお願いしたいという私の気持ちを込めた『四つのI』なのです。この四つを全部語呂合わせしてみるとIntegrity、Insight、Imagination、Individualityいずれも「I」という文字で始まっています。みんな「I」で始まる言葉ですから皆さんにも覚えやすいと思います。ぜひこれを大切に愛してください。もうちょっと皆さんに笑っていただきたかったと言うのが本音ですが、最後までなかなか笑っていただけなかったのは残念でした。

ご清聴ありがとうございました。



講演後、別に関われたワークショップで学生たちと



砂川学長（左）と瀬名波名誉学長と

小和田先生 名桜大学での講演等写真記録ダイジェスト



名桜大学特別講義「90年の人生を振り返って」

2022年4月27日

I. はじめに

「90年の人生を振り返って」というテーマでお話しする背景

II. 戦争と私

満州事変	1932年9月18日	その1周年記念日に誕生
支那事変	1937年7月7日	その一年前に小学校入学
太平洋戦争	1941年12月8日	国民学校三年生
終戦	1945年8月15日	旧制中学校一年生

III. 国際関係と私

東京大学進学 — 国際関係／国際法への関心
ケンブリッジ大学留学 — 国際法への専心
外務省入省 — 外交の実践に携わることの意味

IV. 大学と私

大学で学ぶことの意味
日本と外国の大学教育の在り方 — 「教授」と「教育」

V. 国際裁判所と私

国際裁判所とは何か — その役割と限界
国際紛争処理の理論と実践

VI. 沖縄と私

沖縄がおかれてきた歴史
1945年4月1日 米軍の沖縄進攻と占領
1952年4月28日 平和条約第3条下の米国の施政
1972年5月15日 沖縄の本土復帰
これからの沖縄の課題と展望

VII. 結びとして（個人的所見）

- (1) 沖縄の若者に期待する「明るい沖縄の未来」の創造
 - ① 沖縄の地政学的、経済学的特性を生かした発展
 - I.T.産業、データセンター等の誘致・育成
 - 国際開発協力の中核基地の拡大・強化
 - 観光インフラの基盤整備（大学観光学部の強化・育成）
 - 離島の医療・看護・介護施設の強化
 - ② これからの産業を根付かせるための人材育成
 - これらの分野での高専・大学レベルの専門家養成の重要性
 - ③ 日本の最南端沖縄の地政学的特性を生かした親和力の活用 — 東南アジアとの文化的、社会的交流の拠点設置
- (2) 若い皆さんに培ってほしい人格的資質 — 「四つの愛（I）」
 - ① Integrity
 - ② Insight
 - ③ Imagination
 - ④ Individuality